リステラス星圏史略
古資料ファイル
７－４
（ジースト開国）
（仮題）

（発掘整理中）

霧樹里守 is 土岐真扉

ここに来てから泣いてばかりいる新入りにレイはいいかげんうんざりしていた。

『　（下書き）　』　（@専校？）

2007年3月10日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

ここに来てから泣いてばかりいる新入りに
レイはいいかげんうんざりしていた。

咲子と呼ばれていた頃、わたしには意味があったんだよ。

『　（草稿）　』　（@高校？）

2007年3月9日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

「蘭咲子。咲子——咲く子」
「花が咲く子、新しい文化の花開く子。
——……咲子と呼ばれていた頃、わたしには意味があったんだよ。今ではサキ・ランは単なる記号に過ぎない」

「帰りたい？」
レイが尋ねる。秘やかに、心の寂しさのありったけをこめて。
「帰れない」　サキが答える。
「帰りたい？」
「帰れない」
「帰りたい？」————————……

幾度も繰り返される、同じ言葉。幾度も繰り返される、同じ、答。

繰り返し、繰り返し、波のように———向き合った二面のガラスの鏡のように、他のもろもろの感情を押し流して、ただ深い寂静とした哀しみだけが今の二人の間には残されていた。
「帰りたい？」
————————　「還れない」
誰よりもその答を良く知っていて、知っているくせに、レイは、また尋ねるのだった。
窓の外はただ無限の世界。

（無題）(現在わたしはソレル女史の小さな特殊研究所の一つで暮し）

『　（無題）　』（＠これは中学1年だ‼(^◇^;)と思う☆）

2007年5月1日 連載（2周目・地球統一〜ESPA）

　ほの暗い部屋の中、そこだけが明るい机の上で、一人の少女が手紙を書いていた。少女の名は白蘭（びゃくらん）咲子（さきこ）。戸籍には単にサキ・ランと記（しる）されていた。

　それというのも、彼女の故郷（ふるさと）地球では、すでにこの雅（みや）びな言語が公用語として使われなくなってから久しかったのだ。

彼女は、その長く伸びすぎてしまった髪の、陽光のもとでは銀ねずみ色に輝やき闇の中では蒼暗い夜の海の灰色となって目をふさぐ、ひたいにかかった邪馬なひとふさを左手で払いのけながら、なおも右手でペンを走らせていた。

彼女は、古風にもペンと紙で書いていたのだ、録音転写機を使わずに。

　――心配しないで下さい。

彼女の、やや右上りかげんにかっちりと整（ととの）えられた文字は、なおも書き進められた。

　わたしは安全な所にいるし、健康状態も良好です。

　ただ、なんのためにここに来た、いえ、来なければならなくなったのか、

　あれだけ愛した学校からなぜ離れたのか、それは聞かないで下さい。

　いずれ――わたし自身、起った事の意味がはっきりとつかめたら、

　その時に話します。

　突然の失踪でずい分みんなに心配をかけたろうと思います。

　でも姉さん、こうしなければならなかったのだと言うことを

　わかって下さい。

　まだたったの12歳にしかならない、しかも他人（ひと）よりも

　はるかに無邪気に育ってきたわたしには、これ以外に取るべき道が

　見つからなかったのです。

サキは、ここでしばらく筆を止めた。

あらかじめ書くべきことを考えていたとはいえ、あの恐ろしい事件にふれずに事を説明するのは不可能だった。

書くにつれあの時の恐怖、宇宙の深遠にいきなり放り出されたような恐ろしさを思い出して文章あ脈絡のないものになってくるのだ。

　しかたなく彼女はあきらめた。

自分自身が、あれ以来強制睡眠剤なしには眠れないような状態の中で、あの敏感な姉を安心させられるような手紙を書けるわけがない。

　とにかく。と、彼女は再び書き始めた。

現在わたしはソレル女史の小さな特殊研究所の一つで暮し、女史の
保護を受けています。
今後の教育はたぶん、ずっとここで受けることになると思います。
わたしの他にもここで暮している女の子が二人いるし、ソレル女史の
部下の数人の研究所員と、ひまな時には女史自身が話し相手になって
くれると言っていましたからさびしくなることはないでしょう。
それに、ソレル女史の秘書の糸がわたしたちの学課と生活の管理を
しているから、今までいた学校と大して生活に差はありません。
——遠すぎて卒業するまで地球に帰れないという点も。

サキは、再び読みかえしてため息をついた。
今はこれ以上ましなものは書けないわ……。

レイが部屋の中へ入ると、赤い非常灯だけがともっている暗闇の中でサキがかすかに動いた。
「だれ？」
それには答えずに照明のスイッチをひねって、レイは
「ここはあたしの部屋でもあるんだけどね。……はん。また泣いてたの」

（※「録音転写機」……自動口述筆記とプリントアウトをしてくれる未来機械のこと。う〜ん……。1970年代の中学1年生が考えつく未来像にしては、なかなかのセンスだと思うんですけど……♪(￣ー￣)♪ ＜自画自賛賞賛委員会＠MIXI所属。w）

『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（3）　』

『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（3）　』　（@中学……か、高校1年？）

2007年5月8日 連載（2周目・地球統一〜ESPA）

仙魔人（エスパッション）集団（サークル）

☆　11〜17歳位にかけてのサキの百面相（w）のイラスト群あり。

5000÷3．26＝154

163÷50＝3．26　　1パーセク≒3．26光年

統和　6年　地球統一、遂に完了。

統和12年　統一者リースマリアル没す。開発途上惑星20余となる。

統和40年　リスタルラーナ星間連合より全権大使飛来。

統和41年

（宇宙暦元年）リ・地平和条約締結。

宇宙暦　2年　文化発展15ヶ年計画開始。

第一回研修団リスタルラーナへ。

宇宙暦10年　S．S．S．（スリーエス）

（リスタルラーナ最高の教育機関）へ、

第一期交換留学生団出発。

×　×　×

宇宙暦14年　リスタルラーナのソレル女史、第三の星間国家

ジーストを発見。

そして14年　8月　9日　……

『　一、総会本部　』

[『　一、総会本部　』（@これは中学1年だ!!(^◇^;)と思う☆）](#)
2007年5月2日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

一、総会本部

　リスタルラーナ星間連合本部の最上階にある総会会議場。
臨時総会を終えて退場して行く各星代表の通るロビーからは少し離れた、専ら参考のために会議に招待される学者たちが使用することになっている小ロビーの一つで、今度のような重大会議に関係を持つにしてはおよそそれらしく見えないような少女が二人、じれったそうに立ったりすわったりしながらだれかを待っていました。
　一人は、海のほの蒼い夜霧のような長い灰色の髪に、不思議によく光る黒い瞳をした一四、五歳の、背の高いスラリとした少女で、頭を動かすにつれて髪の間から見え隠れするやや黄色みのかかった白い丸い耳から見て、地球人のようでした。
　そしてもう一人の方はまだ十一、二歳、小柄でかわいらしい少女で、やわらかくカールした薄茶色の髪にふちどられた色白の顔に、大きなエメラルドの瞳が並び、そのななめ上につきだしたつんととがった幅の広い耳が、彼女がリスタルラーナ人であることを証明していました。
「遅いなあ。なにをやってるんだろう。」
背の高い方の少女がまたつぶやきました。これで三度目です。
「あわてても仕様がないわよサキ。」
「だけどケイ、会議が終ってから十分はたってるんだよ。」
ケイと呼ばれた方はそんなやりとりをしながらもゆったりとソファーに腰かけて悠然と本を読みつづけていましたが、サキの方は立ったり座ったり、一時もじっとしてはいられません。
「あ、来た!!」
　会議場の自動扉が静かに開いて、連邦屈指の女性科学者であるリスタルラーナ人のソレル女史ともう一人、青い髪にチラチラ光る金色の瞳（め）をした背の高い少女が出てきました。
この二人こそが今日の会議の中心だったのです。
「や！サキ。はてたよ～～。なにせお偉方の面前で一時間も説明させられてさ。言葉使いは気をつけなきゃならんし思わぬ質問は飛びだすし......もう冷や汗のかきっぱなしよ。」
　そうサキに話しながら、なおも持っているレポートで顔をあおいでいる少女は、名前をシスターナ・レイズと言い、その瞳の色や細長い耳の形から、地球・リスタルラーナのどちらにも属さない種族であることはあきらかでした。
『ごくろうさまレイ。で、どうでした？ソレル女史。』
ここからが重要会議です。サキは預かっていたバッグと上着を二人に渡しながらテレパシーを使いました。

『まあまあのできですよ。ほとんどの星は賛成しましたし、あと二、三の案件が改正されるのを待って……そうね。順調に行けば次の臨時総会には九十九パーセント決定するでしょう。』
やはりテレパシーで答えながら無造作にコートをはおったソレル女史は、今度は口を使って、どこかで食事でもしましょう。と三人を誘いました。
大ロビーほどではないとは言え、けっこう人の通るここで、テレパシーだけの会話を交わしていてはあやしまれます。
「それとも」と、女史は笑ってつづけました。
「“果ててしまった”レイは一刻も早くエスパッション号へ帰りたいのかしらね？」
これを聞いて三人とも笑いだしました。
　あとはもう例の“あやとり会話”のやりとりです。
これは、サキが始めてこの訓練を受けた時につけた名前で、一つの話題をテレパシーで、他の話題を声を使って、たがいちがいに切り換えながら並行して話すのです。
普段から彼女たちがよくやるゲームで、たとえば二人組でスムーズに会話を進めようとしたりすると、声で話しながらテレパシーを聞き、すぐまた交替して……ということになり、しかもことばの長さはまちまちなため、へたをすると同時に両方を使ってしゃべるはめになる、というわけです。
　けれどこの場合は四人で気楽に話しあえばよかったので、ともすれば“心”の話題と“声”の話題を取りちがえるクセのあるサキも、一度もとちらずに続けることができました。
『この廊下一つ見ただけで、いかにリスタルラーナのエネルギーが不足しているかがわかるでしょう。』
表玄関へと通じる主要通路の一つを歩きながら、ソレル女史が言いました。
『この連盟本部ビルは50年前、リスタルラーナの経済最盛期に建てられたものです。そして愚かなことに私たちはエネルギーを使いすぎました。』
　彼女は広い廊下の動かない自動送路（ベルトウェイ）を、始めのうち常に働き続けていたその送路を、廊下に人がいる時のみ動くように調節した機械を、そしてその機械すらここ十年来停止させられたままであることを3人に示しました。
『わずか50mたらずの通路にまで送路をつけて、物質文明の便利さにのぼせあがっていた人たちは、エネルギーには限りがあるということを失念していました。――人々の異常な程の浪費に、エネルギーはまたたくまに減少し、それでも人々は気楽に考えました。新しい惑星を開発すればすぐにもエネルギーが手に入ると。そんな時、連合最大のエネルギー供給源であったアラク星とリスラエル星が戦争を始め、両星が産出するエネルギーのほとんどがこの戦争につぎこまれてしまいました。
『今でも覚えていますよ、』
そう言って、女史はさもおかしそうにクスクスと笑いだしました。まるで、なにかおかしい思い出でもあるようでしたが、幼ない時から女史のもとで教育されたケイにしかその理由はわかりませんでした。
『……それが』と、女史は続けました。『ちょうど20年前のことです。』

『それ以来、私たち科学者は新しいエネルギー源の開発に努めて来ましたし、政府は惑星開発に力を入れました。』
『ついでに地球にまで足を伸ばしてね！』
ケイがチョロリと口をはさんで笑いました。
『ま、わたしもサキもそのおかげでこの世に生まれることができたのだけど……』
『そう。13年前にリスタルラーナの代表が始めて地球へ訪れ、その1年後には地球・リスタルラーナ両連邦間に友好通商条約が結ばれました。
でも、地球から送られてくるエネルギーはとても少ない。リスタルラーナ産のエネルギーと合わせても最低限必要なだけしか使うことができません。』
『エネルギーさえあればもっともっと科学を発展させることができたのに……』
「本当に、物事ってなにが幸いするかわからないなあ！」
サキが始めて知ったとでもいうような大声を出したので、隣を歩いていたレイは大急ぎでサキをつねらなければなりませんでした。
ついに“あやとり”を“取りそこね”たのです。
しかし人気の少ない通路には、痴話ゲンカの合間のこのとんきょうなセリフに特に注意を払うような人はいないようでした。
『すみません。』サキは素直に謝まってから話を続けました。
『実際、もしリスタルラーナにエネルギーがありあまっていたとしたら、13年前にわたしは生まれることができなかった。ケイだってたぶんそうだろう？　そして今度はエネルギーの不足が原因で、女史の作戦がスムーズに運んだ。この作戦がうまくいけば、わたしたちの“仲間”が大勢できて女史の夢が実現できるようになるし、レイは故郷（ふるさと）に帰ることができる。』
『宇宙嵐で歯医者がもうかるような話ね』と、ケイ。
『あとは地球連邦議会の方の決定しだいか。――どうなるか見当つきませんか、女史』
『無理よォレイ。いくらソレル女史でも手紙一本じゃ地球政府を説得できないのよ。……せめて音声だけででもじかに話せれば別だけど……。』
　そう。リスタルラーナ連邦がこんなにも早く賛同を示したのは、まえもってソレル女史が説得して歩いた結果でした。
連邦屈指の科学者で、しかも政界・財界通して知人の多い女史は、連邦会議の議員一人一人の性格や主義を計算に入れて、暗にほのめかしたり正面切って頼み込んだり、実に巧みに持ちかけるので、ほとんどの人はあっというまに説き伏せられてしまうのです。
　これは、彼女がかなり強力な超能力者だったおかげなのですが、知らない人はこれを、彼女の若さと美しい姿態のせいだろうと思っていました。
実際、もし彼女が超能者ではなかったとしても、物静かなアルトで熱心に話す女史に向って反論しようとする人は滅多にいなかったでしょう。
　そのソレル女史が謎めいた笑いかたをして言いました。
『地球連邦中央議会の方針はもう決まりましたよ。賛成するそうです。』

（※「アラク星とリスラエル星が戦争」......(^◇^;)げっ......。
　えぇ。言うまでもなく、コレ書いた当時は、昭和の「オイルショック」の直後でありましたとも......☆☆（^◇^;）☆☆
　でも、なんで「イラクとイスラエルが戦争」なんだろう？ヨルダンの立場はどーなる............？？（^◇^;）”？？

『　二、記者団　』

[『　二、記者団　』　（@これは中学1年だ!!(^◇^;)と思う☆）](#)
2007年5月3日 連載（2周目・地球統一〜ESPA）

二、記 者 団

　サキたち三人は一瞬ソレル女史の言った意味がわからずにキョトンとした顔になりました。
地球連邦の会議はリスタルラーナ側と同じ時間に行われたはずです。
と、いうことは、地球側の会議の結果がリスタルラーナに届くのは、早くとも今日の夕方までということになるのです。
『なにをそんなに驚ろいているの？』と、ソレル女史。
こういう時の女史は、ケイがいたずらを考えている時と同じ目をして笑いました。
『だけど女史、いったいどうやって……？』とレイ。
『まだ地球国内にも公布されていない時間ですよ。』
『私の勢力範囲がリスタルラーナだけだと思っていたのなら間違いですよ。古来から自分が行く事のできない場所に代理人（エージェント）を置くのは当然の事とされていますけれどね。』
ソレル女史はいったん口を切って三人が納得したかどうかを確めました。
『ケイの試作したテレパシー感知器の性能がいいと言って喜んでいましたよ』
　わあっ　と、三人は喜びの声を上げました。
『それじゃわたしたちの“仲間”なのね!?』とケイが言いました。
『どんな人なんですか。名前は？　年は？』とサキが言いました。
『何級能力者なんですか』と、超能力者を別段珍しいとは思っていないレイが落ち着き払って聞きました。
『そうですね。正確には計った事がないけれど、だいたいBの上かA級ぐらいでしょうね。』
ソレル女史は最後の質問にだけ答えました。
その話は食事をしながらゆっくりすることにしましょう、と言うのです。
『今はその暇がありませんからね』
　女史の言う通り、四人が歩いて行く先、連合本部ビルの表玄関には、多勢の新聞記者がたむろしていました。
　「ギャア!!」　レイがいつもの癖で叫びました。
「ひょっとしてあの連中、あたしたちのこと待ってるんじゃない!?」
「そりゃしかたないよ。なんていったってレイが今日の会議の主役だったんだから。」
「そうそう。ね、サキ、わたしたちは先に行って反重力車（くるま）を出して来ましょうよ。」
「う……ん。そうだなァ。わたしらは今のところ関係ないんだし……」
　サキはしばらくためらっていました。レイを見すてるのも悪いんだけど……。

でも結局、目の前の記者陣にはかないません。
ケイに引っぱられて走りだしたサキにレイが一言、
「裏切り者ぉ!!」
ソレル女史が笑いました。
「さ、行（ゆ）きますよ、レイ。話していい事と悪い事と、うっかり言葉じりをとられないように気をつけなさい。なにしろ総会専門の記者のしつこさと言えば、ことわざに引用されるぐらいのものですからね。」
「だいじょうぶですよ女史、間違えやしませんから。……しっかし、議員集団の次は新聞記者か……。ウエーッ。」
　ソレル女史が、かつてはいつでも動いていたリスタルラーナ式の自動回転扉を手で押して一歩外へ踏み出すと、……わっ、と記者の群れが押し寄せて来ました。

（☆Gペン入れた「挿し絵風」絵柄の正装の女史とレイのイラストあり）

初めの十分程はレイもあまりひどい目に合わずに済みました。
記者たちが、異星人に好奇の目を向けながらも、まず取材しなれているソレル女史に話しかけたからです。
彼らは、かつての地球の新聞記者ほど無作法ではなく、質問を始める前にはかならず挨拶を交わすことになっていました。
ことにソレル女史には礼儀正しく振る舞います。
彼女が優れた科学者であるということより、彼らにしばしば特ダネを提供するということのために。
　ソレル女史は彼らに、レイの母国ジースト星間帝国のことや、レイが女史のもとに来た時のてんまつ、ジースト星系で産出される多量のそして地球＝リスタルラーナにはないエネルギー鉱石のことを、かいつまんで話しました。そして、会議で話したと同じ演説をもっと手短かに、わかりやすく話し、最後にこう言って口を切りました。
「わたくしは、リスタルラーナの頭脳たる連邦議員のみなさまが、母星の利害などにひきずられて判断力を失ってしまうようなことはしないと信じています。」
　もちろん、この言葉が活字になり、各議員が母星と連絡を取る前に目を通すことを予想した上でのセリフです。
いつも自星の首脳陣としめし合わせて来る何人かの議員に、先手を打ってクギをさしておいたわけです。
　ともあれ、これでソレル女史が話すことはなくなりました。
レイは（内心嘆息をつきながら）にこやか〜に笑って、やつぎばやな質問に答え始めました。
――リスタルラーナに来たのは何年前？　どこへ？
4年前、10の時です。女史の宇宙船の中にいきなりはきだされた。
――そこのところがよくわからないのだけど、あなたの口から説明してくれる？

はい。ええと、ジーストはあまり科学が発達してないんです。それで宇宙での事故がよく起こるんだけど、その時できた空間のゆがみではじきとばされて来たらしいんです。まあ、一種のワープみたいなものだと思うんだけど……
――『らしい』というのは？
実は、あたしにもよく解らないんです。事故の時のケガでところどころ記憶がなくなっちゃってるんですよね。
――なるほど。
――ところで、二ヶ月前と先週と、二回に渡ってジースト政府との交信がありましたが、あなたも参加しましたか？
はい、一度目の呼び出しの時に。
――その時だけ？
ジーストは身分制度がうるさいんです。帝政ですから。それであたしみたいな身分の低い人間は、元首と会うことは許されない。
――もう一度聞くけどあなたの名前は？
レイ。シスターナ・レイズです。
――自分の星に帰りたい？
　かなり鋭い質問から愚問としか言いようのないものまで、実に延々と長々しく質問が続きます。
最初のうちは落ちついていたレイも、20分もたったころにはすっかり混乱してしまいました。
『女史!!』
ぐあいの悪い質問に黙秘権を行使しながら
『この連中、いつもこんな早口なんですか。』と聞きました。
異国人というのはこういう時に便利です。都合が悪い時は意味がわからないふりをしていればいいのですから。
『そうですよ。むしろ普段より遅いくらいですね。』
　いつもこんなのとつき合っていられるなんて、女史はいったいどういう神経をしているのでしょう!!
レイは（もともと短気なので）もう質問を聞くのもいやになりました。

（未完）

（※推測するに、コレ書いてたのは『指輪物語』（原典）を読んだ後で、アニメ映画版を見る前。かな？　竹宮の『地球へ』と萩尾の『11人いる！』の影響モロうけまくり……ていうか既に「模写」状態だった……から脱却して、「海外児童文学または海外幻想文学（翻訳ファンタジー物

）の挿し絵風絵柄で、「自分で文章書いて挿し絵も描く！とか、考えていた頃のやつ…
…☆（^◇^;）☆）

『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（4）　』

『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（4）　』　（9月20日分＠中学……か、高校1年？）

2007年5月9日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

仙魔人（エスパッション）集団（サークル）

1.

残暑のきびしい秋だった。
巨大都市リスタルラニア――いや、実は首都惑星リスタルラーナそのものが一つの超巨大都市なのだが~~――でも、この辺りまで来ると~~説明不足。、“真夏”というのは暦（こよみ）の6～7月にかけてなのである。したがって、8月の今は、“秋”。
が、小部屋の窓は『非自然的』な冷暖房を迫害したがるサキの好みで開け放ってあり、内部は朝っぱらからかなりの蒸し暑さだった。
加えてご丁寧な事には、すぐ窓下から始まる公園地区の雑木林の中で、リスタルラーナゼミがギンギンワンワン鳴きたてているのである。
極寒地育ちのレイには、とてもじゃないが寝ていられるものではなかったらしい。ベッドの隣でごそごそやっている物音にせっつかれて、サキもしかたなく眠りからひきずりだされた。
無精がってまずは片方だけ薄目を開け、壁に埋め込み式の時計に目を遣る。
まだ、かなり早いはずだ。
が、壁にはいつもの時計はなかった。
――ああ、そうだったっけ……。
サキはようやく思い出して、のそのそ起き上がった。
ここは船の中の自分の部屋ではないのである。
周回軌道上にある研究所兼居住用宇宙船エスパッション号に戻る暇がなくて、昨夜はそのままこのソレル女史の小さな臨時用マンションに泊まり込んだのだ。
「……あ、ふ……」
眠い目をしばたいてあくびをする。枕もとのナイトテーブルから腕時計を取り上げると……あれ、もう8時半だ。9時間の眠っちゃったのか――やれやれ。
何がやれやれなのか、とにかくしかたがないので起きる事にした。
レイはと言えばもう既に服を着がえて――彼女はいつも毛布の中で着がえてしまうのだ。幼少時からの習慣で――ベッドから出て行くところだった。
サキもベッドの端に腰掛けて、頭から服をひっかぶる。
なんだか靴をはくのがおっくうだった。が、仕様もない。ここは自分の生まれ育った家ではない

のだ。
地球でも、リスタルラーナでも、常に床面を清潔に保って裸足で生活する素晴らしい――サキにとって――風習は、既に事実上姿を消して久しかった。
　さて着変えると言っても替えの服なぞ持って来ているわけはない。どうせ昨日と同じ服に、いい加減摩耗しだした髪止めでとかしもせずに伸び放題の髪をひっくくると、それだけで朝の仕度は終りだった。後はお腹になにか詰めこめば良い。
　化粧？　整髪？　……！？
例えそろそろさほどおかしくはない顔つきになりつつはあったとしても、14歳と14歳半のサキとレイとはどちらも自分の持つ美しさに気がついてはおらず、したがって自分を飾る事に対してもまだ何の興味も持っていないのだ。少なくとも普段の時は。
　「サキ」
「うん？」
なおもぼけっと覚めきらない顔で腰かけている彼女にレイが窓辺から声をかけた。
「来てみ、ちょっといいながめ」
乗りだしつつ言うレイ自身も、白い肌に青色の髪がよく映える。
声の調子につられて立ち上がったサキは、レイの気紛れな金色の瞳を見ながら、もうずいぶんの間朝日というものを見ていないと思った。　それにしても、どうしてこう気分が晴れないのかな。あながち眠気のせいばかりでもないようだけれど。
「ああ、わ、ほんとだ。」
確かに一日の始めにながめるには素適な景色だった。
窓下5m、距離にして10mくらいのところから種々の緑がそよぐ公園地区の木立ちが始まっており、太陽は朝日と呼ぶにはやや昇りすぎのきらいもあったが、それでも遠く小さく青白色の安定した光を投げかけて来る。
空は、金緑色のかかった水色だった。（※）
　二人ともしばらくは無言のままたたずんでいたが、しばらくすると
「あ、あ、あ。また会議場かあ」レイの方が先に口をきいた。
「あは、大変でしょう。マス・コミ相手にするのは」
「そーおサ。それを昨日は車をまわして来るとかなんとか言っちゃ先に逃げちまって、この薄情モン。」
「だってあの場合わたしら関係ないもん。それにちゃんと頃合い見はからって助けに行ったじゃない」
「よく言うよ。10分も人を質問責めに合わせといて」
「それが“頃合い”だったんだよ」
「はっ！」
　レイがすねてみせるのを横目に、サキはくつくつ笑いだした。
　サキ・ラン＝アークタス14歳と4ヶ月目。なる顔のイラストあり。
（……だって。レイが真面目な顔してあんなに行儀良くしてる図なんて……そうそう見られたも

のじゃないんだもの……）

聞きつけてレイが、サキの額のすぐ横の所でパチンと軽く空気を弾けさせた。
サキは慌てて“遮蔽”を降ろし、さっと瞬時に臨戦体制に入る。
――つまり、背後のベッドに飛び乗って取っ組み合いのために身構えたのである。
このいたって効率の良い原始的スキンシップ法を二人の間に持ち込んだのは、もちろんレイの方だ。
　が、その時、ちょうど階下から――この建て物は丁度上二部屋下二部屋の2階層式マンションになっていたので――お呼びがかかった。
「サーキ！　レイ！　食事ができたってー、降りて来て！」
お仲間兼二人の被保護者、2つ年下のケイが叫んでいる。
サキとレイはちらりと互いに見交すと、無言のまま先を争ってドアへ突進した。
サキは目覚めた時の心の曇りを、すっかり忘れてしまっていた。

☆

「視ていましたよ。またやってましたね、あなたがた。」
階下――実は三階――のLDKに飛びこんだ途端、珍しくエプロンなどした姿のソレル女史が、非難と言うよりはあきれかえったという声でいきなり話しかけた。
「まったく嘆かわしいですよ二人とも。14歳にもなったというのに……」
「おはようございます女史。レイはもう3ヶ月で15になりますよ」
　サキが朝のキスで、さっさとその口をふさいでしまった。

☆　　　　　　　　☆

（※「空は金緑色のかかった水色だった。＜ちょっとたんま！　教科書見て考えておくから！　Sep.15」なる姉の書き込みあり。……ってことは、姉が高校で地学を取ってて、私がまだ中学2年時点……の文章だということだ？　☆(^◇^;)☆

★さらにラスト部分に「ごちゃごちゃぬかす割にはイギリスファンタジイ風対応だな　Sep.20」とか書いてあるし……★(￣^￣;)★

　うぅ～るせぇぇぇぇっ!!
　中坊にそんな高踏的なSF設定ができるわけないだろうっ！

★(￣^￣;)(￣^￣;)(￣^￣;)(￣^￣;)(￣^￣;)(￣^￣;)★””””

　ってことで、そろそろこの辺りから姉に自分の原稿を見せないように隠し始めた頃……だと思われます★　(^◇^;）d

『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（5）　』

[『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（5）　』　（@中学……か、高校1年？）](#)
2007年5月10日 [連載（2周目・地球統一〜ESPA）](#)

　地球統和紀元41年、つまり新紀元――宇宙暦――1年に、ここに居合わせているケイ（ケイト・エレンヌ）の両親で、まだ未婚だったケティア・サーク、カート・エレンヌ両大使が、友好通商及び全面的な文化交流をも含んだリスタルラーナ＝地球間完全平和条約を取りつけてから、はや13年たつ。☆
新しい宇宙時代の黎明期を迎えて、リスタルラーナ星間国家連合と地球連邦政府とは、従来の10パーセク内外という守備範囲を一挙に越え、互いに結びつかんとして空漠とした宇宙空間へ着々と植民の腕を伸ばしつつあった。
エネルギー源の絶対的不足を訴え続けて来たリスタルラーナの、進んだ技術に、若い国地球が結びついて初めて成し得る好挙である。
　（わたしは宇宙時代の一番最初の人間だ）
サキはごく幼ない頃から自分の誕生日を誇りに感じて来た。
つまり、14年前のその日、4月3日に、宇宙人“襲来”の最初の誤報にショックを受けた病弱なサキの母は、その記念すべき日のうちに7ヶ月目だったサキを早産したのだ。
その母も無理なお産から回復せずに6年後サキの初等課入学に安心したかのように息をひきとり、その後サキは殆ど6つ歳上の姉サユリに育てられた。
　誕生の際、「母子ともに危険」だと宣告された難産から無事サキを救い出してくれたのは、女性大使ケティア・サークのとっさの最良でまわされて来た、リスタルラーナの宇宙船医だった。
その話を繰り返し聞かされて育った少女が、いつかリスタルラーナへ行ってみたいと憧れるようになるのも、まあ当然と言えば言えるかも知れない。
当時はまだエネルギー源の問題から、地球–リスタルラーナ間の定期航路は最低でも丸二年はかかると言われていた。
　したがって有資格者以外の一般人の渡航はまだまだ難しく、ましてや初等課2年の児童に許可がおりる可能性など、万に一つもなかったのである。
が、宇宙暦8年に公表された“二国家間交換留学生団募集要項”が、憧れを実現可能な夢に変えた。
幼児教育課程において既に一年飛び級（※）をしていたサキは、両親から譲られたIQの高さをフル活用してなんとかかんとかもう一年をかせぎだし、浮いた一年を徹底した受験準備に費した。
（※）　サキの場合、4歳時に幼育課2・3年の進級試験を同時に受け、両方ともうかったので、2年の課程はとらずに3年へ上った。ただし誕生日が微妙なので当人はそのことをすっかり忘れていた。

そして留学メンバー選考を一手にまかされ、地球系最高の水準を誇っている教育機関アロウ・スクールを経て、なんとかかんとかギリギリの成績で留学資格を手に入れてしまったのである。
留学先は、地球–リスタルラーナ定期航路のまっただ中。

両系の親密な発展と繁栄を祈って、どちら側からも一年行程という空間にわざわざリスタルラーナ本星から移転して来た、リスタルラーナ系の最高教育機関S.S.S.(スリーエス)~~（スリナエロス・ソロン・スレルナン）~~（と、地球学生から憧れと尊敬をもって呼ばれている）科学部門だった。
　が、サキは留学後半年、12歳の時にそのS.S.S.(スリーエス)からソレル女史のもとに引きとられている。
事情があって、そこにいることができなくなったのである。
以来2年半。
2星系屈指の女性科学者ソレル女史が秘密裡に運営しているESP研究所、可動性宇宙基地（ベース）エスパッション号で、高等教育とESP能力の訓練を受けながら、表向きはソレル女史の側近兼ボディガード（！？）として、サキは現在けっこう優雅な毎日を送っている。
そして……

☆　　　　　☆　　　　　☆

☆　大使が条約を取り付けたって表現はどんなもんかね。大使1人の力じゃないだろうに
　Sep.20＜by例によって姉★(￣^￣;)★
……う～るせぇっ★　2歳も下の人間の学力にイチイチ難癖つけて「偉ぶりたがる」テメェのほーが、よっぽど大人げも教養も無いわっ！！　★(￣^￣;)★

『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（6）　』

[『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（6）　』　（@中学……か、高校1年？）](#)
2007年5月11日 [連載（2周目・地球統一～ESPA）](#)

☆　　　　　　☆　　　　　　☆

　サキ、レイ、ケイ、ソレル女史の四人が、四人も入るとやや狭く感じられるマンションのLDKで遅い朝食をとっていると、これまたずいぶん遅めに朝のニューズカセットが配送されて来た。
ケイがすぐ壁の映写盤にセットする。
と、聞き慣れた旋律が流れ見慣れたアナウンサーの顔が映り、“昨日午前10時より夜8時まで、2度の休憩をはさんで延々8時間に渡って行われました、第3回臨時星間連合総会の模様をお伝えします……」の声と共に、なんと他ならぬレイの横顔がパネル全体にアップで映った。
「あ！　ちょっと！　レイよ、レイ！」
「わーっ　すごい。あの真面目そーな顔ったら！」
「“そーな”たあなんあのさ、サキ！」
おかげでソレル女史は最初の部分を聞きのがしてしまったのである。
女史が手を上げて制するまでの30秒間、部屋の中では少女たち3人の喚声以外何も聞こえる状態ではなかった。
「……時20分までは、ソレル女史の提出された資料に関する、弱冠の質疑に対して、医師、科学者からなる調査団から応答がなされました。その後1時間半の休憩をはさんでソレル女史の簡単な経緯説明があり……」
　その辺の進行は、むしろアナウンサーよりサキの方が詳しいくらいだろう。なにせ当事者のレイとソレル女史から昨夜たっぷり聞かせてもらってあるのだから。

☆　　　　　　☆　　　　　　☆

~~　レイはリスタルラーナでも地球でもない。第三の国、ジースト星間帝国の人間である。帝国とは言っても実際の帝制及び皇帝家の血統は途絶えてしまってから何代にも渡り、現在では数人の枢機卿から互選される宰相職が実権の大半を握っていた。~~
~~帝国の首都惑星は、黄色い小粒の太陽“ジーティ神”の回りを巡る、ジレイシャとアンガヴァスの2連星で、地球・リスタルラーナがそうであるように、やはり最長の歴史を持つ文明発祥の地だった。~~
“ジースト”とは「“太陽（ジーティ）神”の征服地」の意であり、その版図には必ずしも、発生を異にする人類が存在していなかったわけではない。
殊に、首都惑星を形成している二連星、ジレイシャとアンガヴァスの間には、現在に至るまでジーストの文化と政治形態に多大な影響を与え続けている長い確執の歴史があった。

　詳しい経緯をお知りになりたい方は、図書館へ行って14年7月からのニューズカセットを参照されたい。ほとんど連日関連記事が乗っているはずである。
歴史の苦手な方の為にあえてここで説明を加えるならば、要は、現在ソレル女史始め友人の科学者達数人は、新しい星間国家ジーストの発見と、そことの……

没。

『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（1）　』

[『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（1）　』　（@中学……か、高校1年？）]
2007年5月6日 連載（2周目・地球統一〜ESPA）

リゲルB
デネブA

　　　ジースト到着時点から開始すること！

「！
　見えた！　ソレル女史。あれがジーティ太陽系ですよ」
ワープ終了と同時の航法士の声に、まずまっ先にレイがパネルの下へすっ飛んで行った。
続いてサキが後を追う。
「……あれが、……ジーティ？　……」
レイの視線は喰い入るようだ。自分の国の首都惑星を照らしている太陽を始めて見るってのは、いったいどんな感じなんだろう。サキはそんな事を考えながら、恒星（ジーティ）とレイの顔を交互に見比べていた。
あ、あのB型恒星はまるでレイの髪と同じ色合いじゃないか。
してみるとレイの見事な青髪は、地球人の金髪みたいな感覚になるんだな……。
サキは全く無関係に、常々レイが自分の髪をあるごとに自慢しては大事に伸ばしていた理由を納得した。レイの髪はサラサラに長く伸びて、今はもう背中の半分ぐらいを見えなくしているのだ。
向うではソレル女史、エリー、ケイの三人が、安全ベルトを外したまま、リクライニング・シートに腰掛けて何か話し始めている。右から順ぐりに銀髪、金髪、つややかな栗色。
無意識に自分の、灰色がかった薄茶色い髪に手をやっている事に気がついて、サキは慌てて頭を振った。
~~この髪は昔からこんな色をしていたわけではない。全ては三年前、十二の年に変わってしまったのだ。そう…………。~~
~~けれど、それを思い出してはならない事を今ではサキも知っていた。あの事件を思い起こせば、サキは再び自己の暗闇に陥ち込んでしまう事だろう。~~
~~つとめて忌わしい記憶を呼び起こすまいとしているそんな~~彼女を知ってか知らずか、航法室を出しなにソレル女史が振り向いて声をかけた。

「サキ、レイ、いらっしゃい。最後の打ち合わせをしておきましょう。」
「へ〜〜い、サキ、行こ」　いつもの調子で返事をすると、これはパネルを見ながらも、ちゃんとサキの表情に気がついていたらしい。レイがやや乱暴かつ強引にサキの腕を引っ張った。

　時は新暦の14年10月。地球–リスタルラーナ、二星間国家が初めて接触してより15年目の秋である。
リスタルラーナの進んだ技術と、つい40年程前に地球本星内の統一を終えて宇宙に乗りだした地球の未だ枯渇していない資源とが結びついて、両国は順調に発展の輪を広げつつあった。
が、「枯渇していない」はあくまでも欠乏状態にない、というだけの事であって、「満ち足りている」には程遠いのだ。殊にエネルギー問題は深刻だった。
リスタルラーナ系星間連盟では、20数年前にエネルギーの主要産出国、リランとラクの2星を相互間の戦争で失ってから、エネルギー鉱業は事実上破綻していると言って良く、地球系星間連邦でも国交開通当時に期待された程には輸出量を伸ばせていない。
リスタルラーナと違って技術的にはまだまだ遅れている地球系は、国内で効率悪く使用されてしまう燃料が多いのだ。
そんな時、第三の星間国家、ジーストが、全くの偶然からソレル女史に発見された。ジースト星間帝国は技術レベルにおいては地球・リスタルラーナに比べてはるかに貧弱で、わずかに危険度の高いワープ航法が行われる他は恒星間航行のほとんどを未だに光速飛行に頼っている。
しかし利用法のまずさから大部分を宇宙空間に帰納させてしまっているとは言え、ジーストの帝国内では地球・リスタルラーナで知られているどんなものにもましてはるかに効率の良いエネルギー鉱石“ゼン”が採れる。
リスタルラーナ使節団は、今、ソレル女史を始めとした多数の科学者をも含めて、友好通商条約調印の為にジースト本星へ降下しようとしている所だった。

（速いもんだねえ、2週間か。」
（150パーセクの道程（みちのり）を？）
かつて地球–リスタルラーナ間を2年の年月をかけて旅して来た経験を持つサキは、近づきつつある青い恒星をながめて、あらためてそう思う。
（女史が研究室で合成した疑似“ゼン”でさえこうなんだもの。本物をリスタルラーナ科学技術の中に放り込んだら、いったいどれほどの事ができるようになるだろう。地球–リスタルラーナ定期便はきっとわずか1週間くらいって事になっちゃうよ。辺境星域の探険船も、きっとひんぱんに飛びたつようになるだろうねえ）

×　　　×　　　×

『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（2）　』

『　（リゲルB　デネブA　150パーセク）　（2）　』　（10月4日分＠中学……か、高校1年？）
—

2007年5月7日 連載（2周目・地球統一〜ESPA）

×　　×　　×

「さ、では」とソレル女史が言った。
「各自、自分のやるべき事は了解していますね？」
細いシガレロを取り出して優雅に唇にくわえる。紫煙がたなびくが、無論これは一昔前のような喫煙者以外にまで害を及ぼすものではない。リスタルラーナに地球からこの因襲が伝わった時、化学者たちがいたって有効なフィルターと金属筒で、すっかりそれの性質を変えてしまったのである。
ソレル女史の言った各自、はるばるジーストまでソレル女史にくっついて来たサキ、レイ、エリー、ケイの4人は、そろって女史の執務室とも言うべき部屋に集まっていた。部屋、と言ったがこれを船室と呼ぶのは正確でない。ブルーを基調にした飾り気のない部屋はしっとりとした雰囲気をかもしだしていたし、そもそもこのエスパッション号自体が“船”ではない、可動性の基地（ベース）なのだから。
「はーい、女史」
最年少、今年12歳のケイがなんとも愛くるしい声で答える。
サキはこの子を見るたびに思うのだ。この子と言ったってサキと2つ違うだけなのだが、（うっそでしょ〜〜〜。わたし12ん時だってこんなに無邪気じゃなかったよーーー）。……。
栗色とこげ茶色の中間あたりだろうか、髪と同系色の瞳がいかにも素直な性格を思わせる。やはり3歳この方宇宙空間で純粋培養されていると、こういう子ができてしまうのだろう。
「まず」とエリー（エリザヴェッタ・アリス・ドン＝レニエータ！）が話を引き次ぐ。
「ジースト本星の周回軌道に乗った時点で、あたくし達4人は各自別れて行動する事になります。ケイは御両親のエレンヌ大使夫妻の乗っていらっしゃる船へ移動して、そちらの資格で入国。——これは年齢が足りないからですが、あたくしとサキ、サキは少し変装しなければなりませんわね——あたくし達は女史の秘書兼身辺警護（ボディガード）という事になりますわ。そして……」
「あたしとミス・クラレンが留守番さ。」とレイ。
ミス・クラレンはソレル女史の私的秘書（プライベート・セクレタリー）だ。今はソレル女史のすぐ後ろにひかえているが、身障者排斥の風潮が強いジースト上流社会に降りて行くのは、いくら賓客扱いとは言っても安全ではないだろう。彼女は盲目なのである。
「はっ」レイが両手をホールドアップ、といった感じに開いて、行儀悪く椅子を後脚立ちにした。どうせ留守居役などと言っても、着陸してから頃合いを見計らってさっさと地表までテレポー

トして~~しまう~~もぐりこんでしまう心算りだが、元ジースト帝国人で帝国最大のお訪ね者であるレイは、正体がバレでもしたら“安全でない”どころのさわぎではない。見つかったその瞬間に最高の悪意をもって帝国警察に迎え入れられるだろう。レイはそんな自分の故国の状態が腹だたしくてならないのだ。

　レイとエリーはすこぶる仲が悪い。レイにとってブルジョア階級とは“敵”の代名詞に他ならないし、まして王侯貴族の娘ときては何をか言わんやである。そして、エリーにはレイの粗暴な態度とむきだしの敵意がなんとも我慢￥まんできないのだ。

今も、レイの悪意は転嫁してエリーに向けられていた。

《何ですの！？　その眼は》

《眼？　眼は目だけどね。あんたちっとあ普通の言葉使えんの？》

エリーがぐっと詰まる。テレパシーで二人だけにしか通じない会話だったとは言え、顔つきを見ればまわりの人間にわからないはずがない。

しばし、気まずい沈黙。慌てたサキとケイが同時に口を開いた。

「ま、まあまあレイ……」

「それで？　女史。そこから後の予定は変更ないの？」

ソレル女史がケイに合わせて本題に戻る気配を見せたので、その場はひとまず治まったが、レイの凄じい目つきを見て、いつエリーがかんしゃく玉を爆発させるかとサキは気が気ではなかった。

……ったく☆

　結局、ソレル女史はたいして予定（スケジュール）を変更する気はないようだった。

着陸まであと3時間。ケイは若い航法士の一人に送られて、使節団の母船に乗っている両親のもとへ小型船で「お引っ越し」して行った。

レイは、仲の良いサキがここ当分エリーと組んで出歩く事になるのが気に喰わないらしく、すこぶるヒステリックな顔で自室に引き上げてしまっている。

「さ、サキさん」

反対にエリーはひどくうれしそうだ。彼女はまだエスパッションに加わって間もないので、一番友好的なサキと行動できるのにほっとしたのだろう。ま、レイと組んだらどーいう事になるやら察しはつくが。

「あたくしはこれでも16歳にしては大人っぽい方だから良いのですけれどもね、あなたはまだ14歳で就職年齢に達していないのでしょう。身分証明書は偽造してあるのだから、奇異に思われないよう少し姿を変えなければなりませんよ。」

サキはエリーの口調に思わず苦笑した。考えてみれば、ひと月前にエリーがやって来て以来、2人っきりで話す機会はこれが初めてだ。

小国とは言え一国の王の長女として目一杯気位高く育って来たエリザヴェッタは、連邦屈指の科学者であるソレル女史に対しては非常にいんぎんで社交的な態度を取るが、大使夫妻の娘のケイはともかくとして、代々西欧諸国家では蛮族と見なされて来た東方騎馬民族の血をひくサキや、

故国では（いわれのない罪ではあるけれども）返逆罪で最高刑が待っているレイを相手にした時、どういう態度をとるべきなのかさっぱりわからずにいるようだった。
へりくだった口をきいてみたり、今のように侍女をさとすような口調になったり、下男に命令する声音を出してみたり、いろいろするのである。
　時代錯誤（アナクロ）だ、とサキは思う。地球において全ての身分制度が禁止されてから既に半世紀はたっているのである。祖父が、アイン族（ヌウマ）最後の族長として統一政府と戦った時代だ。
「ねえ。」　たいして考えもしないうちに、声の方が先に口に上った。
「わたし達がソレル女史について一つの目的を仕上げようとして集まって来ているのである以上、わたし達は“仲間”だと思うんだけど、どう？」
突然の質問に、明らかにエリザヴェッタは面喰らったようだ。
……「あたくしは、これまで他人（ひと）と対等な交際、というものをした事がないのですわ」
いきなりへりくだった口調になる。あーもうやだ。頭痛がして来る。
サキは頭をかかえこんだ。う～～と一声。うなる。
「いいや、いいよ。要はお化粧しろって言うんでしょ。面倒みてよ。」
そして何か、エリーの顔がとてもなつかしいもの——どうしても思いだせない——に似ているように思われてくるのだ。
その後長い間、サキはそれを思いだしたくて記憶巣をさぐりつづける事になった。

　ジースト到着時点から始めて、~~ミステリー風に~~描写を続けながら続々挿話をぶっこんで行き、リア、サキの恋、レイの想い、過去回想など全部通してオーダの事へうづく、ひとつのミステリー大系。

（たぶん、サキがレイに言ったセリフ）

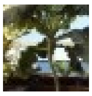
『　（メモ）　』　（@高校？）

2007年3月1日 連載（2周目・地球統一〜ESPA） コメント (1)

「——さぁ？
　なんとなく考えごとして、
　なんとなく寝て、
　なんとなく寝つかれなくて、
　眼がさめたんで、
　考えごとの続きして、
　解決したんで寝た。」

（たぶん、サキがレイに言ったセリフ）

コメント



りす

2007年4月20日5:03

すっかり御無沙汰してしまいました。申し訳ありません。
インフルエンザとか風邪とか喘息とか気管支炎？　とか、
バイト先の赤字閉店とか転職（店舗異動）とか整体師の
繁盛しすぎとか……(^_^;)……色々重なっておりました。

で、本当は現在、2007年4月20日、午前5：14。
でも、「日記」のほうは前回からの日付、引き継ぎます☆

(^_^;)(^_^;)(^_^;)(^_^;)(^_^;)(^_^;)(^_^;)(^_^;)

[『　（最初？の設定ノートより☆　6　）　』　（@小学3年〜中学1年!?）　(^◇^;)☆　]
2006年12月22日 連載（2周目・地球統一〜ESPA） コメント (1)

●◆●◆●

一方レイもジースト星の宇宙空港に着いていたが、レイの心は彼女の部屋と同じように殺風景なほどさっぱりしていた。彼女は1年以上もジースト星に来ていなかったが、感傷などにはつきあわず宇宙船の中で練った計画どおりに動いた。
幸運なことにレイはワープの真っ最中でも考えごとにふけることができたし、それは彼女の自慢できるものの1つである。
レイはこの手を使って今まで何度もサキをへこませてきたことを思いだし、ひそかにほほえんだ。しかし口からもれたつぶやきはまったくちがうことを言っていた。
「まずは大使館のトリーニ・ユウさんね」
大使館に住んでいるということは考えに入れる必要はない。住みこみのそうじ婦から大使その人まで実にさまざまな人がいるからだ。
レイは受け付けへ行くとソレル博士の使いだと名のり、トリーニ・ユウさんを呼び出してほしいと言った。ソレル女史の名も、また、かなり知れわたっていたからである。
レイは応接間へ通され、数分彼女を行った。表われたのはまだ17、8才の少女だ。レイは立って彼女と握手した。地球からもたらされたこの奇妙な風しゅうは非常な親しみを呈する。
「私がトリーニ・ユウです。」自己しょうかいによると彼女は大使の秘書ということだった。
「シスターナ・レイズです。よろしく」
2人は向かいあってすわった。レイはユウの目を見つめた。ユウの目は困惑の色を浮かべた。レイはユウの心に触れ、その強さを確かめた。大丈夫、これならまずいことが起こっても記憶を消してしまえる。
「失礼。さっそくですが、あなたは超能力者ですね？」
これはユウにとって困惑どころではすまされなかった。
「は…………？　あなたは私をからかってらっしゃるのですか？　ジースト人ならだれでも……」
「そのことではありません。ではあなたは自分の力に気づいていないのですね。あなたは超能力者です。ためしにその花びんを浮かせてごらんなさい。」
「何の事です!?　私はそんなものじゃないわ！」
『でも、私の声が感じられるでしょう？』
レイはごく弱い思考波をユウに向けて投射してみた。そしてユウの顔色がそれとわかるほど変わっていくのを見ながら、彼女の能力をどれだけひき出せるか、不安に思った。
~~「そんなはずないわ！　私がそんな……ああ！」~~ユウは叫ぶなりテーブルに突っ伏して動かなか

った。彼女が泣いているのをレイが知ったのはだいぶ後になってからだった。ユウの落ちつくのを待ってレイは熱心に説得した。初めは夢の中の悪魔見るような顔つきだったユウもだんだんうなずくようになった。レイはすべてを説明し終わりテレパシーで賛成を促した。ユウもさっきのような激しい表情は見せず、落ちついて思考波を送り返してきた。
『わかりました。わたしも協力させて頂きます』

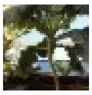
●　　　●

コーナ・フレークスはもっとちがっていた。彼女は大きなひとみでレイを見つめ、何も言わず部屋にまねいた。そしていきなりテレパシーで話しかけた。
『私にご用ですか？』
レイは驚いてひと言も発せなかった。コーナ・フレークスはさびしげに笑った。

（未完）

.

コメント



りす
2006年12月23日22:49
この頃の最大の愛読書がすべて、
翻訳ものの児童文学だったので、
文体が、いかにも翻訳調ですねぇ......☆　(^_^;)”

『　（無題）　』　今までわたしずっとおミソだったでしょう。（@中学？）

『　（無題）　』　（@中学？）
2007年3月8日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

「サーキ♪」
「
「レイにね、頼まれたの。落ち込んでるからなぐさめてくれって。
あたしじゃだめだ――って、すごく暗い顔してた。」
「そう……」
「それでね、わたし少しうれしかったの。」
「え？」
「ほら、今までわたしずっとおミソだったでしょう。わたしがいるとみんな気を使って、暗くならないよー、深刻な話題さけて通ってたでしょう。」
「え、そう――かな、」
「そうよ。だからわたし今日、わたしの目の前でレイが落ちこんで見せてくれたのって、そりゃ少しはびっくりしたけど、実はとてもうれしかったのよ。」
「落ちこむと――うれしいの？」
「ええ♪　だって、ほら、やっと自分も1人前にあつかってもらえたんだな――、みんなの役に立てるくらい大人になれたんだなー、って、満足感があるじゃない。」
「そ、そうゆうもん？」
「だからね、サキも頑張って落ちこんでてね。
これからは、その分わたしがしっかりしててあげるから♪」

『　（無題）　』　（@高校時に愛用のルーズリーフに手書き。）

2007年5月14日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

　――どうして――……？
なぜサキはあんな風に、いつも孤独（ひとり）でいようとするのか？　それがエリーにはどうしても理解できなかった。サキは、いつも誰よりもほがらかに笑って見せるんだのに、ある時ふっと気がついてみると、その笑顔の下からどうしようもない真実にも似た淋しさがのぞいているのだ。
彼女がいつになくその固く閉じこもったからの存在を見せつけてしまってから、かれこれ3時間近くもエリーはその事ばかりを落ち着かなく考え続けていた。
　それに、サキの安否も気にかかるのだ。
　自分が友人として愛している人間が一人っきりで闘っているかも知れないような時に、側に行って手助けする事ができないという事実は、ひどい劣等感となって心にのしかかって来る。エリーには、彼女について行くだけの能力もないのである。
すぐ隣りではケイが、いかにものんきそうにして何かを五線紙に書きつけていた。
地球の古代楽器に関するレポートの一環なのだろう。指を使うのがおっくうなのか、速度が遅くなるから提出に間に合わないのか、体の左側――座っているひじのちょっと上あたりに――写本している何かの総符を宙に浮かばせて、そのまま残留思念を頼りにあちらこちらとテレコキネシスでページをめくっている。
　――悪いくせだわ。やめさせなくては。
　そうは思いながらも声をかけるではなく、エリーは何気なしに壁の時計へ目をやった。あと二時間でレイが戻って来る。
すぐにサキを探しに行ってもらったところで見つけ出せるのはいつの事なのか。
　（それまで何事も無ければ良いのだけれど――……）全て自分の無力さが災いしているのだ。
　「えっ？　何か言った？」
　知らないうちに心の壁にすき間ができていたのだろう。ケイが彼女の心の断片を聞きかじったらしい。
さらに自分の無能力さを思い知らされて苦々しく思いながらも、エリーはつとめておだやかに首を振った。
　「……なんでもなくてよ、ケイ。それより本を扱う時にはきちんと手をお使いなさいな。サイコキネシスで宙に漂よわせておくなんて、行儀が悪くてよ。」
　ケイは首をすくめて本を引き寄せると、今度はちゃっかり書く方のペンを手から離して動かしている。エリーは少しばかり噴きだしそうにしたが、笑みは頰に張りついたまま、手の平の雪のように溶けくずれていってしまった。

『　（無題）　』　（コクヨの400字詰め原稿用紙にボールペンで縦書き＠中学？）
2007年5月12日 連載（2周目・地球統一〜ESPA）

　サキは追い詰められている。歩いている。本当は走りだしたいのだが、それもできずに、歩いている。
　右を見る。
　左を見る。
　雑踏。人混み。騒がしくさんざめきながら通り過ぎて行く人々の群れ。初夏の太陽。風。
――不意に。目の前が赤く、暗くなって行く。視界がせばまる。
汗。汗。じっとりと冷たい汗が全身を覆う。
サキは耐え切れず、わけもわからない言葉を。喚き、叫び始めた。
頭をかかえこむ~~ようにして、~~。路頭にしゃがみ込んでしまう。
　――道行く人々の眼が彼女にそそがれる。
驚き。好奇。そして疑問に満ちた眼が。
　サキは恐怖に駆られて走り始める。恐慌状態――パニック。必死で走り抜ける彼女の上に、大通りを行き交う人々の視線がからまりつく。
~~　サキは十六歳。まだ少女だ。が、大人びている。明るい表情をしている時にでも、どこかに暗い陰があった。~~
~~長い灰色の髪に、灰色の眼。寄宿舎を抜け出して来たままの、ぞろっとしたネイビーブルーの制服姿。~~
~~名門私立校の記章のついたベレー帽を、つかんでいる。無意識につかんでいる。~~
　いつの間にか川べりについていた。人影がまばらになる。サキは歩調を落とす。
木陰にベンチ。サキは腰を降ろす。
　自分がESPERである事は、十二の年に知った。それから三年間、サキは仲間たちばかりの環境で暮らしていた。四年目に、彼女はそこから飛びだす事を願った。そうして今の学校に入ったのである。
　――何から逃げているのか、何を恐怖しているのか。サキは自分でも解らなかった。ただ――……
善良な人々の間に居る事は耐えられなかった。何の迷いもなしに街を歩いて行く人々。外見だけに魅かれて、サキに慕い寄ってくる無邪気な下級生たち。それら、何の穢さも持ち合わせてはいない顔をした、他愛もない人間。
　むしろ、サキは、自分のドロドロした穢らしさから逃れたくて、逃げまわっていたのだったかも知れない。

　市民からの通報を受けたのだろう、素行不良な生徒を捕まえて処罰する為に、川上の方から教師と数人の警官たちが歩いて来ていた。
サキは再び恐怖心に駆られて、見つからないうちにと盲滅法に走り出す。——角を曲がった。
　どすん。
　「気ィつけろ！」
　サキは~~振り向いて~~しどろもどろに謝まろうとする。振り向いて相手を見、それからまた跳びすさるようにして走りだそうとした。
「——サキ!?」
　一瞬間。相手の方が速い。サキは二の腕を捕まれていた。
　「——……レイ……。」
　極度の緊張からか、それとも逆に気が緩んだものなのか、腕を抑えられたまま気を失って、サキはのけぞるように倒れてしまった。

（未完）.

（レイの乳児時代のエピソード～☆）

『　（設定Memo）　』　（@中学2年？）

2007年5月4日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

◎二人はごくあたりまえな普通の人間でした。
　その二人に、人をしてとんびが鷹を生んだと言わせるような美しい娘ができました。
その子の顔立ちはやや異常と言えるほどによく整っていて、赤ん坊nふさわしい愛らしさというものには欠けていましたが、十年後、二十年後の姿が今から予想されました。
――なんて美しい目をしてるんでしょう。まるで冬の空のような澄んだ金色に光っているじゃありませんか。
――それにどう？　この髪。こんなみごとな青髪は見たことがありませんわ。
――これなら、未来の一級市民夫人だって、夢じゃありませんわねェ。
上品ぶった、（もう少しで一級市民権に手の届く）二級市民夫人が思わせぶりに言いました。
この夫人には今年三歳のドラ息子がいたので……。
　二人はつい最近やっと二級市民権を得たばかりで、まだ気の遠くなるほどの借金が残っていました。
そんな中で子供を育てるのは楽ではありませんでしたが、一生懸命働き、むだなお金は使わず、役人の目をごまかせそうな時にはぬかりなく立ちまわって、そでの下をきかせることも覚え、小さな二人の商店は着実に収入（あがり）を額を増やしていきました。
――うん。そうだな。
夫は、よく娘の寝顔をながめて言ったものです。

（未完／レイの乳児時代のエピソード～☆）

『　Z　ゼネッタ（ジースト人超能力者）　ジースト語　』

[『　Z　ゼネッタ（ジースト人超能力者）　ジースト語　』　（＠中学2年!!)　(^◇^;)”](#)
2007年5月25日 連載（2周目・地球統一～ESPA） コメント (1)

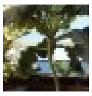
Z　ゼネッタ　（ジースト人超能力者）　ジースト語

　超能力者（ゼネッタ）とはもともと《不可思議な力》の意味で、ジースト星間国家の首都である二連星の一つ惑星ジレイシャの古語《ゼネラ（魔法使い）》から来たものである。
　惑星ジレイシャには古くから超能力を持つ人種が栄えていたが、紀元前一九三年の大革命で（＞ジースト史の章参照）双子星のかたわれである惑星アンガヴァスの住人ジュアリー（普通人の意）に支配されることとなった。
　普通人（ジュアリー）は超能力者（ゼネッタ）を賤民と定め、その居住区や衣料を制限して重労働を強いるなど圧政のかぎりをつくし、一時は生体反応板（プレート）による行動抑制にまでおよんだが最近やや緩和しつつある。
　しかし身分をいつわって市民生活をしている超能力者（ゼネッタ）への仕打ちは惨酷で、発見された者のほとんどは私刑（リンチ）によって殺される。
　また重労働をきらって脱走・不良化する者も多く、ジースト国内の貧民街（スラム）は普通人（ジュアリー）にとって非常に危険な存在となっている。
　なお未確認ながらも超能力者（ゼネッタ）開放軍なる地下組織が各地に「超能力者（ゼネッタ）の里」を作り、超能力者の市民権を得るために闘っているのは周知の事実である。

——宇宙大百科より抜粋——

.

コメント



りす
2007年5月27日1:03
…………………………………A＾－＾；）…………………………

我ながら…………ホントに…………

どーいうアタマの中味の、
中学生だったんでしょうか…………………………….(^◇^;)”

（レイを憎み、「戻ってこなければいい」と）

『　（創作？ノート）　３　』　（@中2!!）

2006年12月31日 連載（2周目・地球統一〜ESPA） コメント (1)

レイの姉さんがわりだった女性。
彼女はレイのたった一人の友だちであった少年に恋していました。
年上ということで口に出せない想いを、
レイは、その彼から気ままに受けています。

~~観~~監視機破壊の最後の瞬間、レイが戻れなくなったのも
そのせいなのです。
彼女は一しゅん、レイを憎み、「戻ってこなければいい」と
思ったのです。

でも、レイの死んだあとも、彼はレイだけを愛しつづけます。
そんな彼に再会したレイは……
すでに昔のレイではなく、前のような愛情は抱けません。
そしてサキを愛していることに気づいてしまったレイ。
三人はお互いにかなわぬ恋を　永遠に抱きつづけねば
なりません。

急いで脱出しよう。
ここはすぐに爆発する。
――戦いは終ったの？

いいや、これから始まるんだ。

（注：
　＞監視機破壊の最後の瞬間、
　ジースト・ゼネッタの復権をかけたクーデター
　（武力……ならぬ超能力……蜂起）の、第一歩の作戦。）

超能力者たち

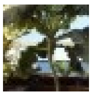
第一部　憎しみを食う樹（サキ）
第二部　社会機構　　　　（アビス）

名　姓
地球新式　　　　サキ・ラン
リスタルラーナ　ケイ・エレンヌ

~~喰憎樹　　喰鬼樹~~

.

コメント



りす

2007年1月3日0:36

……えっと〜……★　(^◇^;)”

だから!!　中学2年生だったんですってば!!
んで、三角関係の愛憎に同性愛に、
異世界（異惑星）の武装放棄革命ネタですかい?!

…………………………われながら……………………

どぉ〜〜〜いぅっ!!　中学生だったんだ〜〜〜〜っ!!??

(^◇^;)""

……そして………………★
このネタが、大晦日の日付けかいっ?!　(^◇^;)""""""

『　（ファイルデータ　トリーニ・ユウ）　』　（@高校**1**年？）

『　（ファイルデータ　トリーニ・ユウ）　』　（@高校1年？）
2007年1月17日 連載（2周目・地球統一〜ESPA）

宰相秘書、ゼネッタ解放軍参謀 兼 スパイ。

（　新生ジーストの「首相秘書」が、）

『　（創作？ノート）２　』　（@中2!!）

2006年12月30日 連載（2周目・地球統一〜ESPA）

……むだよ……
いくらあなたの超能力だって
これだけの傷は治せっこないわ
全身ズタズタで
まだ息があるのが自分でも不思議なくらい
それより手を貸して、
わたしの体から、わたしの心だけを
引っぱり出してちょうだい
早く!!　あなた、わたしを見殺しにする気!?

――――――――――――――――

これでいいわ……　さようなら　サキ
一ヶ所に長くは　いられないのよ
広がって　広がって　……ああ
体がないって　なんて　自由なのかしら
一ヶ所にとどまれないかわりに
同時にいろんなところにいられるわ
わたしあなたと話しながら地球の方まで来てるのよ……
……だんだん眠くなってきたわ……　本当にさようなら　サキ
死ぬんじゃないわ　眠るだけよ
宇宙中どこにいてもあなたを見ているわ
困ったことがあったら思い出してちょうだい
さようなら　サキ　いつまでも愛してる……

（※新生ジーストの「首相秘書」が、
「う〜〜〜!!　寝不足じゃ!!」とうなりながら、
「はい！　こちら首相室ですが!!」と電話をとっている、
シャーペン描きのイラストがあるのですが……、以下略w）

ジーストの雪豹　（８月２８日の早朝めも。2013年）

８月２８日の早朝めも。
2013年8月27日 リステラス星圏史略　（創作）

ジーストの雪豹と呼ばれている生物はたいがいの地球人にとっては「…熊だろう？！」というずんぐりむっくりした外見と動きの緩慢さが特徴なのだが、遺伝子学的には一番近縁の類似種はやはり豹なのだそうで、「あまりの寒さで怠惰になりすぎて脂肪がつきまくった猫」と専門家が笑いながら説明すると、たいがいの地球人はやはり苦笑しながら「ああｗ」と納得してしまうのだった。

「…暑さのあまりに怠惰になった猫というなら、誰かさんに似てるんだけど。」

空っとぼけた調子でサキが言うと、「何が言いたい？」と律儀にレイが突っ込み返した。

マルセイユの波止場風（笑）岸壁に、白い花束もってたたずむ、トレンチコート姿

『　（ポール・モーリア「マルセイユの想い出」）　』　（@高校？年、4月16日）
2007年2月18日 連載（2周目・地球統一〜ESPA）

4／16

“生きるっていうことは自分で思い出を作ってくってことなのね
思い出を作るっていうことは、その中にいる時はつらくても、
幸せなことなのね……”ポール・モーリア「マルセイユの思い出」

※　多分この頃よく聞いてた、何かのラジオドラマにインスパイアされてイキナリ増えたエピソードのメモとしてのイラスト。マルセイユの波止場風（笑）岸壁に、白い花束もってたたずむ、トレンチコート姿（爆笑）の、サキのイラストあり。ジースト滞在中、初恋（？）で初体験した相手が実は敵方（アンチ・エスパー派）のスパイだった……と判明し、自分の手で殺した後で、追悼しているところ……の図。罫線入りの普通の大学ノートの上にGペンで主線ひいて、色鉛筆で彩色。

リステラス星圏史略
古資料ファイル
７－４
（ジースト開国）（仮題）

http://p.booklog.jp/book/112803

著者 : 霧樹里守 is 土岐真扉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/112803

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト